



筑紫女学園大学リポジット

On certain Material in Sinhalese Characters
Preserved in the Hakata Mangyouji Temple.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中川, 正法, NAKAGAWA, Masanori メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/67

博多萬行寺所蔵シンハラ文字資料について

中 川 正 法

On certain Material in Sinhalese Characters Preserved in the Hakata Mangyouji Temple.

Masanori NAKAGAWA

はじめに

筑紫女学園大学では、学園創立100周年記念事業の一環として、2007年より特別研究助成による共同研究として西国とりわけ北部九州における浄土真宗寺院の文化財調査研究を行ってきた。その成果を踏まえ、平成24年7月、福岡市経済観光文化局文化財部文化財保護課を事務局として福岡市内寺社資料調査指導委員会（委員長：菊竹淳一九州大学名誉教授）が設置され、文化庁史料調査補助の交付を受ける中、平成24年度事業として福岡市博多区にある浄土真宗本願寺派萬行寺（以下、博多萬行寺と記す）の資料調査が開始された。博多萬行寺は、16世紀に開かれた中世都市博多で最も古い浄土真宗寺院であり、近世福岡藩領における浄土真宗（西本願寺末）寺院の触頭を務めていたことでも知られる。筆者も指導委員として同調査に参加しており、本稿はその成果報告の一部である。

1. 「小泉了諦謹呈」梵文資料

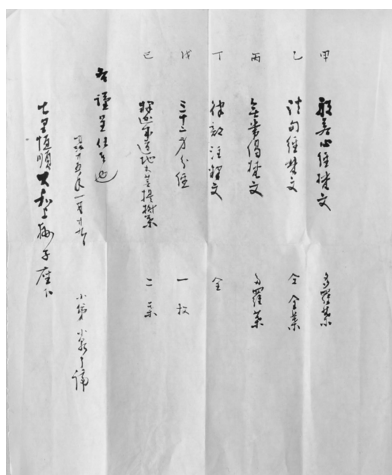
萬行寺所蔵品の中で、方便法身図や六字名号など重要な資料が納められている和櫃の中に木箱があり、その中には一枚の書状とともに貝葉が納められていた。その書状を以下に掲載する。

これまで筆者らが行ってきた北部九州真宗寺院での調査において、梵文資料が保管されていた例がなかったこともあり、しかもこのようなまとまった形での梵文資料の出現に大いに高揚した。

さて、萬行寺住職にこれらの経典・菩提樹葉を寄贈した「小泉了諦」とはいかなる人物であり、果たして書状に記された梵文のタイトルとこれら貝葉の記載内容とは一致するのだろうか。

甲	般若心経梵文	多羅葉
乙	法句経梵文	同全葉
丙	無常偈梵文	多羅葉
丁	律部注釈文	全
戊	三十二身分經	一枚
己	釈迦成道大菩提樹葉	二葉

右謹呈仕候也
 明治二十五年一月二十九日
 小弟 小泉了諦
 七里恒順大和上獅子座下



2. 小泉了諦と七里恒順

小泉了諦（1851～1938）は、福井県鯖江の真宗誠照寺派法林寺に小泉了円の長男として生まれた。弟の了昌は、真宗大谷派の寺院に入寺し朝倉了昌となり後に大谷大学教授となっている。12歳の時、父了円が42歳で亡くなり、赤貧の中「嚴父を兼ねる母」嘉代により育てられた。14歳の時美濃の国大性寺大安師の学寮に入った後、東京に出て漢籍詩文や書道を学び、慶應義塾大学にて英語を学んでいる。自坊に戻り住職を務めていたが、たまたま京都に赴いた時に九州博多の七里恒順和上の事を「浄土門を代表、身を以て法を説ける第一人者、真の大徳」と聞くに及び、求道の一念をもって九州に渡り、博多萬行寺にて恒順和上にまみえている。明治18（1885）年5月のことである。初対面の時の様子ならびに恒順師に対する尊敬の念は、了諦による『七里恒順師語録』の緒言に詳しい〔小泉了諦 1910〕。

「故に学寮（龍華教校）に投じて今日一日一日と思う間に、知らずして和上徳化の中に三年を経過した。そしてすでに和上と共に光明の広海に浮かべる自らを見出すに至ったのである。」とあるように、恒順の下に留まること三年を経て「報仏恩の念仏に徹せざるを得ない身となり」北陸へ戻っている〔小泉了海 1970：25-30〕。

後述するように、了諦は後にセイロンへ留学するが、彼の地にて恒順師からの手紙を受け取ったときのことを次のように記している。

海外にありて日本の郵便を手に得ることは嬉しいことの随一で有た、中に於ても母よりしての郵便、又は書留郵便の著した時は格別といふべし、それよりも嬉しかったは恩師七里和上の手簡を手にした時である。（略）左様なる和上の疑うべくもない、直筆が海外にて受けられたのであるから、嬉しかったとは此上なしである。

「明治24年2月5日 七里恒順拜 小泉了諦法兄寶蓮座下」と記された恒順師からの手紙の全文が上記引用文の直後に掲載され〔小泉了諦 1916：123-124〕、また、『恒順師語録』の「附録」にも同文が掲載されている〔小泉了諦 1910：附録1-2〕。

尚、了諦は、和上の手簡を記したことで思い浮かべたと行って、友人から龍華教校について問われていたことを思い出し、教校の模様を詳しく記している〔小泉了諦 1916：124-127〕

3. 留学僧小泉了諦と梵文經典

帰郷後の了諦に突然転機が訪れる。明治二十年代、各宗派などの派遣により、「留学僧」「海外渡航僧」としてセイロン（現スリランカ）やインドに赴き、仏教修行に励むもの、あるいはサンスクリット語・パーリ語を修学し仏教を原典から学ぶものが相次いだ。彼ら留学僧の動向については、近年研究が進み、その実態が明らかになってきている〔奥山 2004・2008、石井 2008〕。小泉了諦もこの時期の留学僧の一人であった。彼は、弟朝倉了昌が大谷派の派遣でスリランカに渡ることを知り、「弟朝倉了昌が大谷派の山命を受けて印度に航せんとする節、予も我本山の命を帯て同行せんことを決し」〔小泉了諦 1916：26-27〕ている。小泉は誠照寺派からの派遣として神戸より出港した後、1889（明治22）年6月18日、朝倉了昌、本願寺派からの派遣である川上貞信ならびに神智協会会長のヘンリー・オルコットとともにコロンボに到着した。

セイロンに滞在中了諦は、紀伊半島沖で遭難した軍艦の生存者を彼らの母国であるオスマン帝国イスタンブルに送致する途中コロンボに寄港した日本海軍の「比叡」と「金剛」を訪問し、艦長に面会した後乗組員に講話をし、結局便乗しイスタンブルへ向かった。1890年11月20日のことである。〔小泉 1916：39-42、奥山 2008〕その後了諦は、ヨーロッパに向かい、欧州を旅行しながらパリのギメ博物館にて浄土真宗の報恩講を勤めたことが知られている。〔小泉 1916：77-84〕

このような小泉了諦の留学中の出来事にも関心があるが、本稿では、彼が留学中にサンスクリット語やパーリ語をどのように学び、どのような研究をなしたのかという点に注目したい。

そもそも、了諦の留学の目的は、セイロンにてサンスクリット語とパーリ語を学ぶことにあった。その背景には、仏教の提携を呼びかけパーリ語学習を勧めたスマンガラ僧正の手紙を携えながら仏教の団結・復興を説いてまわったオルコットやダルマパーラの来日がある〔石井 2008：9〕。

セイロン到着後、直ちに智昇（了諦はウキヅジョーダヤと表記。Vijjodayaか）大学に入り、総長シリ・スマンガラ大僧正に師事することを得て、サンスクリット語とパーリ語を学んでいる〔小泉了海 1970：37〕。了諦は、灼熱の中、日光を椰子の蔭に避け、勉強に励んだという。彼が学んだ經典が以下のように示されている〔小泉了海 1970：38〕。

先考が彼の国の三蔵中、攻究の小乗並に大乘の經典左の如し
法句經（パ） 戒經（パ） 法集名数經（パ） 阿毘達摩薩具波（パ）
樂有莊嚴經（梵） 仏説阿弥陀經（梵） 仏説無量壽經（梵）
般若波羅蜜（原文：密） 多心經（梵） 能断金剛般若波羅蜜經（梵）
仏頂尊勝陀羅尼經（梵） 比登波泥沙（梵）その他

了諦が、語学を学び研究をするにあたり、どのような文献を用いていたのか、いずれの資料にも

記載がない。ただ一つの手がかりとなるのが、「小泉了諦遺品展」の図録に掲載されている写真である〔小泉了慧 1986：15〕。そこには、CHILDERSの*DICTIONARY OF THE PALI LANGUAGE*があり、「パーリ語文典」「梵漢辞典」「パーリ語文 戒経・法句経研究ノート」と紙片にタイトルが書かれた文献や直筆ノートが並んでいる。いずれも了諦の自坊法林寺の所蔵である。

ヨーロッパ滞在中の1891（明治24）年2月4日と5日、了諦は英国ロンドンを訪問している。

禿（了教）氏と共に^{オックスフォード}牛津大学に高楠（順次郎）氏を訪問したのは愉快の極で有た、予が楞伽（セイロン）に留学中年月は隔てたれとも二氏何れも椰樹林下の寓居を叩かれ、暫時乍ら清談快話を試みたのである、その二氏を英に訪ふて前話を継の愉快は格別で有たのである。（略）大学に「マクスミラ博士」を訪ひ岩倉子爵の寓居に茶話會を催ほす〔小泉了諦 1916：71-72〕

1891（明治24）年2月5日 大学校を巡覽し博士マクスミラル氏の屋を叩きしに生憎スコットランドへ行たる留守にて面語を得ず岩倉子爵其他二三士に面し茶話會を開く〔中村 1893：43〕

両文献に、オックスフォード大学を訪ね高楠順次郎と再会したことが記載されているが、後者により、マクス・ミュラー博士とは会えなかったことがわかる。大学を訪問し高楠と会えたことにより、了諦はヨーロッパにおけるインド学・仏教学研究の最先端に触れ多くを学んだに違いない。しかし残念ながら、それらに関する記載はいずれの文献にも見られない。

セイロンに戻った了諦は、病氣療養から回復した弟了昌とともに、インドへ仏蹟参拝の旅に出かけ成道地ブッダガヤをはじめ、王舎城・ルンビニ・クシナガラを訪れている。恒順和上に寄贈した菩提樹の葉は、この時手に入れたものであろう。

再びセイロンに戻った了諦は、スマンガラ大僧正の許を辞し、師から三衣一鉢や仏舍利を与えられている〔小泉了海：49〕。また、スマンガラ大僧正から秀源法主宛の親書を受け、以下のよう

了諦の師スマンガラ大僧正は、我法主臺下に贈らるゝ直書を予に托されて、
帰朝の上臺下に納めました、直書を譯すれば斯くの如くである。（以下一部のみ）

尊下の弟子小泉了諦拙僧の傍らに於て、三年間勉強致せり、その学問は
巴里及散斯克栗多にて、暫時に能く学び得たり

佛涅槃後二千四百三十四年一月白月第十三日

ウキッジョーダヤ、パリワエーナ寺

大僧正 シリ スマンガラ 〔小泉了諦 1916：134、小泉了海 51-52〕

親書を携えた了諦は、1891（明治24）年6月11日、無事帰国した。

さて、了諦のセイロン留学から仏教の学修そしてヨーロッパへの旅について報告された文献を見てきたが、彼により将来された経典や資料に関する記載がほとんどないのが残念である。帰国した了諦は、直ぐに本山へ行き、留学の報告とともにスマンガラ大僧正からの親書を法主秀源上人に捧呈し、「仏塔貝葉経典三衣」等を献じたという。しかしその経典の事に関する記載はない〔小

泉了海：51-52]。

本稿で今問題としている萬行寺宛の了諦による書状では、明治25年1月に貝葉等のセイロン土産が謹呈されているが、恒順和上に会い留学の報告とともに捧呈したという記載は見いだせなかった。ただ唯一、恒順和上を見舞ったときの事は以下のように記されている。

ともかく皈朝後僅に二年に充たずして慈母入寂の衝撃は大きかった。

ましてこの年四月、恩師七里和上が不治の病中風にてたおれられたのを病牀に見舞い、博多に留まること数日、涙の中に皈坊して間もなくの計

であった。一時に両臂を失った思いであった云々と追懐していた〔小泉了海：57〕

以上のように、萬行寺所蔵梵文資料が、どこでどのようにして手に入れられ、どのような形で小泉了諦から七里恒順和上に捧呈されたのかを具体的に示す資料は、現在のところ見つからない。鯖江市の法林寺に所蔵されている遺品の中に、あるいは萬行寺資料調査で記録された多くの文書の中に、シンハラ文字資料に関する情報が残されていることを期待するばかりである。

4. 「梵文」資料について

ここでは、小泉了諦が恒順和上に謹呈した「梵文」資料「甲」から「戊」について、タイトルとの整合性を含め検討していきたい。

(1) シンハラ文字写本

(甲) 般若心経梵文 多羅葉

横31.8cm×縦5.2cm 2つ穴 第1葉表裏各4行 第2葉表4行 裏3行。

シンハラ文字で表記された、小本『般若心経』サンスクリットテキスト全文である。

‘namaḥ sarvajñāya āryāvalokiteśvara’で始まり、‘iti prajñāpāramitāhṛdayaṃ samāptaṃ’で終わる。

(丁) 律部注釈文 全

横35.7cm×縦4.9cm 2つ穴 全5葉 表裏各7行 各葉とも裏面に1から5と番号が表記されている。シンハラ文字で表記されているが、内容に関しては未検討。資料の中では最も写本の形を整えている。

上記「甲」「丁」の二つの資料に関しては、「シンハラ文字写本」と位置付け、稿を改めて検討することとする。

(2) シンハラ文字資料

次に「乙」「丙」「戊」の三資料について検討を行う。これらは、いずれもシンハラ文字表記であるが、以下に示すように「写本」として取り扱うのは適当ではないと判断し、「シンハラ文字資料」と位置付けることとする。

(乙) 法句経梵文 多羅葉

何重にも折りたたんで保管されている一枚の貝葉（ヤシの葉？横186.5cm×縦4cm）

を広げると、中央部分にシンハラ文字で4行にわたって書写された文が現れる。この長い貝葉は、どう見ても実用的な写本とは考えられず、あえてこのような形の葉を用いて読誦とは違った目的のために作られたものではないだろうか。その内容は以下のとおりである。(—~~~~—は、貝葉に記されているまま)

- [1.1]yo sabbalokamahito karuṇādhivāso mokkhākaro ravikulambara puṇṇa cando
 ñeyyodadhiṃ suvipulaṃ sakalaṃ vibuddho lokuttamaṃ namatha taṃ sirasā
 munindaṃ —~~~~— sabbapāpassa akaraṇaṃ kusalassa upasampadā sa —~~~~—
- [1.2]cittapariyodapanaṃ etaṃ buddhāna sāsanaṃ —~~~~— āruyha dāna maya
 nāva manuna pañño saddhā lakāra sahitaṃ guṇa bhaddha puṇṇaṃ saṃsārapāraduritākara
 sāgarassa pāraṃ payanti sujanā nacireṇa evaṃ —~~~~—
- [1.3]ye gahaṭṭhā puññakarā sīlavantā upāsakā dhammena dāraṃ posenti taṃ namassāmi
 mātālī —~~~~— satthuppasatthasaraṇaṃ caraṇaṃ¹⁾ janānaṃ
 brahmādimoli maṇiraṃsi saṃvāhantaṃ paṅkeruhābhamudukomalacāruvaṇṇaṃ
 vandāmi —~~~~—
- [1.4]cakkavaralakkhaṇamādadhānami²⁾ —~~~~— natthi loke raho nāma pāpakammaṃ
 pakubbato passanti vanabhūtāni, taṃ bālo maññatī raho³⁾

途中波線のような記号で区切られている上記の文を検討していくと、六つの部分よりなることが分かる。以下それぞれ順に番号を付し、内容を検討した結果を以下に記す。

- (1) yo sabbalokamahito karuṇādhivāso
 mokkhākaro ravikulambara puṇṇa cando
 ñeyyodadhiṃ suvipulaṃ sakalaṃ vibuddho
 lokuttamaṃ namatha taṃ sirasā munindaṃ
 あらゆる世界のものたちに尊敬され、慈悲と忍耐にあふれ、
 太陽を一族とする空に輝く満月であり、広大な知識の海を知り、
 この世における最上のもの、彼に頭をつけて礼拝すべし

Telakaṭāhagāthā における第2偈に対応する。セイロンでは、サンスクリット語の影響を数々の韻文作品が編纂された。[v.Hinüber §403] その一つが、98偈頌よりなるTelakaṭāhagāthā である。作者や年代など詳細は分からないが、Mahāvamsa、Dhātuvamsa、Rasavāhinīなどに物語や偈頌が引用されていることが知られている。また、タイで発見された碑文に、この偈頌が刻印されており、偈頌テキストの校訂とともにその詳細も報告されている⁴⁾。

- (2) sabbapāpassa akaraṇaṃ kusalassa upasampadā
 sacittapariyodapanaṃ etaṃ buddhāna sāsanaṃ
 あらゆる悪をなすことなく、善いことを行い

自分の心を浄めること、これが諸仏の教えである。

いわゆる「七仏通誡偈」（諸悪莫作 衆善奉行 自浄其意 是諸仏教）として知られる「法句経」の偈頌である。「法句経」と表記されている当該資料（乙）だが、「法句経」から引用されているのは、この偈頌だけである⁵⁾。小泉了諦はシンハラ文字を用いてこの偈頌を揮毫し、地元の人に贈呈している⁶⁾。

- (3) āruyha dāna maya nāva manuna pañño saddhā lakāra sahitaṃ
guṇa bhaddha punṇaṃ saṃsārapāraduritākara sāgarassa pāraṃ
payanti sujanā nacireṇa evaṃ

この文章のみ出典が不明である。文字の読みも含め今後の検討課題としたい。

- (4) ye gahaṭṭhā puññakarā sīlavantā upāsakā dhammena dāraṃ posenti
taṃ namassāmi mātālī
在家者であっても、福德をなし、戒めをたもち、法に基づいて
妻を養う者を、私は敬礼する。マータリよ。

この偈頌は、相应部經典の「サッカ（帝釈天）に関する集成」（Sakkasamyutta）における「サッカの敬礼」と題する箇所に見られる⁷⁾。御者マータリは、神々の主であるサッカに、あなたが敬礼しているのは誰かを尋ねる。それに対しサッカは、自らが敬礼する対象の一人として、上記のことを述べる。

- (5) satthuppasatthacaraṇaṃ saraṇaṃ⁸⁾ janānaṃ brahmādimoli maṇiraṃsi
samāvahantaṃ paṅkeruhābhamudukomalacāruvaṇṇaṃ vandāmi
cakkavaralakkhaṇamādadhānaṃ
蓮の光のような柔らかくやさしく美しき色の光にあふれ、
最上の車輪の相を持ち、人々の帰依処である尊き師の足元に、
宝石で輝くブラフマー神らのごとき髻髪をもって
私は敬礼いたします。

これは、スリランカでは最も知られるパーリ語文学の一つ、Vedeha Thera 作 Rasavāhinī 『ラサヴァーヒニー』に見られる偈頌である。『ラサヴァーヒニー』は、13世紀頃著された仏教徒への教訓的な説話集である。この作品に関しては、欧米の研究者が早くからテキストの出版や研究を行ってきたが、それらを集大成した松村淳子による詳細な研究が発表されている [Matsumura 1992, v. Hinüber §412]。松村は、第5・6章のテキストを校訂しているが、当該資料に見る偈頌はそこには含まれない。幸い、トロント大学図書館が同作品のマイクロフィルム化したシンハラ語テキストを公開しており、参照することができた [Rasavāhinī 1898]。それによりこの偈頌

は、『ラサヴァーヒニー』の巻頭第1偈であることが分かる。確定的な偈の訳を提示するに至っていないが、松村によれば、作者ヴェーデーハ自身が「巻頭偈」の中で、物語自体は彼が創作したのではなく古い伝承に基づくものであると述べているようで、この指摘を参考としたい。尚、Rasavāhinīにおける物語全体は、40話を含むJambudīpuppattivatthuと呼ばれる前半部分と、63話を含むSīhaladīpuppattivatthuと呼ばれる後半部分からなり、前半部分のテキスト校訂と英訳がTelwatte Rahulaによりオーストラリア国立大学の学位論文として発表されているが、未だ参照できておらず、こちらも判読するための重要な参考資料となることを期待している [Rahula 1981]。

(6) N'atthi loke raho nāma pāpakammaṃ pakubbato,

passanti vanabhūtāni, taṃ bālo maññatī raho

悪業をなす者に、この世に隠せとおせるところはない。

愚かにも隠しとおせると思ったとしても、

森の精霊たちはそれを見ている。

パーリ・ジャータカ第305話Silavīmamsanajātaka（品性検査前生物語）における過去物語の第1偈に対応する⁹⁾。この物語は、「悪事は、隠しとおせるものではない」といって、悪事を為さないよう戒めるために釈尊が語られたものである。ある師匠が年頃の娘の婿にふさわしい青年を探すために、衣装などを盗み出して持ってくるように命じた。ところが、あるバラモンの青年だけは何も持ってこなかった。理由を聞かれた青年は、「悪事は隠しとおせるものではないと思います。」といって、上記の偈頌をとなえる。その賢い青年が、現在の釈尊であると結ぶ。

以上、資料（乙）に記載されている内容の検討を行ってきたが、何らかの一貫した理念のもとに選ばれた偈頌が記されているようにも思えない。あえて言及すれば、法句経に説かれる「悪をなしてはならない」という教えが根本にあり、それに関連する偈頌を集成し、小泉が書写を依頼したのではと推測するまでである。

(丙) 無常偈梵文 多羅葉

一枚の貝葉（4 cm×33cm 2穴）の中央に、インクを用いたペンで書写されている。

[1.1] aniccā vata saṅkhārā

[1.2] uppādavayadhammino

[1.3] uppajjitvā nirujjhanti

[1.4] tesam vūpasamo sukho

もろもろのつくられたものは、実に無常である。

生じては滅びる性質のものである。

それらは生じては滅びる。

これらの静まるのが安楽である。

仏教の基本的な教えを伝えるものとして、よく知られている「無常偈」である。長部經典第16経（大般涅槃經）では、仏陀の入滅とともに神々の主であるサッカ（帝釈天）がこの偈頌を

唱えている¹⁰。また、Theragāthā (『仏弟子の告白』) 第1159偈も同じ内容をもち、「無常偈」といえばこの偈頌が挙げられる。相応部經典にも見出されるが、I.2.2では、第1句が ‘aniccā sabba saṅkhāra’ となる点が、当該資料と異なる¹¹。尚、この「無常偈」は、Rasavāhinīにおける「ダンマソングカ王物語」の第33偈にもみられ、やはりサッカがこの偈を唱えている〔松村 2002: 27-28〕。

(戊) 三十二身分經 一枚

白一枚の紙 (25.7cm×39.5cm)、インクを用いたペンで書写されている。

[1.1] atthi imasmiṃ kāye kesā lomā nakhā dantā taco maṃsaṃ nahāru atṭhi atṭhimiñjā vakkam hadayaṃ

[1.2] yakanam kilomakam pihakam papphasam antam antaganam udariyam karisam pittam semiham¹²

[1.3] pubbo lohitaṃ sedo medo me¹³ assu vasā khelo siṅghānikā lasikā muttanti

この身体には、髪、毛、爪、歯、皮膚、肉、筋、骨、骨髄、腎臓、心臓、
肝臓、肋膜、脾臓、肺、腸、腸間膜、胃、大便、胆汁、粘液、膿、血、
汗、脂肪、涙、膏、唾液、鼻汁、間接液、小便がある。

これら身体についての具体的な説明は、正しい道を習得し涅槃の実現のための修行方法として示された四種の心の專注すなわち「四念処」に関して説かれる經典においてみられる。釈尊は、修行僧に対し身体について観察することの重要性を伝え、修行僧が身体について観察するとき、髪、毛より下、足の裏より上の身体は皮膚でおおわれていて、様々な不浄物で満たされていると知ると述べ、上記の内容が続く。

これは、Khuddaka-pāṭhaのDvatimsākāra「小部經典 第3經三十二身分」にみられ「三十二身分經」と呼ばれるように、人間の身体を構成する三十二要素について述べたものである。しかし、当該資料では、「三十一」の要素しか見られない。この「三十二身分經」の原文を以下に示す¹⁴。

atthi imasmiṃ kāye kesā lomā nakhā dantā taco, maṃsaṃ nahāru atṭhi atṭhimiñjā
vakkam, hadayaṃ yakanam kilomakam pihakam papphasam, antam antaganam
udariyam karisam, pittam semham pubbo lohitaṃ sedo medo, assu vasā khelo
siṅghānikā lasikā muttam, matthake matthaluṅgaṃ

両者を比較すると、当該資料では ‘matthake matthaluṅgaṃ (頭の中の脳髄)’ が欠けているのが分かる。この三十二身分に関する記述は、例えばDīgha-nikāyaにもみられるが¹⁵、‘—sedo medo, assu vasā khelo siṅghānikā lasikā muttan ti’ とあり、‘matthake matthaluṅgaṃ’ を欠き三十一身分となっている。従って、当資料の書者が参照したテキストは、Dīgha-nikāyaなど Khuddaka-pāṭha以外の文献と推察される。

さてこの資料では、経文の右下4行目から7行目にかけて、経文以外の内容が記されている。

[1.4] disānāyaka mudiyanse rālapānāvāva

[1.5] hitapu raṭe mahatmayā

[1.6] varṣa 1890k vū juni masa 16 dīna

[1.7] anurādhapurayedīya

[1.4] Disānāyaka Mudiyanse Rālapānāvāva (人名) [1.5] (政府から任命された) 町(村)の長である

[1.6] 1890年6月16日のその日に [1.7] アヌラーダプラにおいて

「アヌラーダプラにおいて、1890年6月16日に、町(村)の長である Rālapānāvāva が書写した」ということがシンハラ語による記載内容であると推定される¹⁶⁾。萬行寺資料の中でも書写者に関する記載が示されている唯一の資料である。この「三十二身分経」を書写した Rālapānāvāva とは、いかなる人物であろうか。

小泉了諦は、1890 (明治23) 年6月大学休暇中にセイロン (西倫) 内地の靈地を巡拝し、その時に見聞したことを詳細に報告している。そこに、当該資料に記載されている6月16日の出来事を見ることができる [中村 1893 : 145-146]。

十五日 八時アヌラーダプラ」ニ達ス (略)

十六日 (略)

六時菩樹精舎ニ至リスーリス僧ナベダンカラ僧正ニ別ヲ告ク僧正菩提樹ノ古梢

一朶葉数片ヲ予輩ニ恵メリ之ヲ受得テ銀子ノ家ニ歸ル此菩樹寺ノアル所ハ法顯三蔵カ

白扇ヲ見テ故郷ヲ慕ヒ紅涙ヲ垂レタマフト云古蹟ナリ 七時後ハ靈智會支部長ルラパナ

ワ氏其他會員十数名相集リ談ヲ交ヘ覺ヘス知ラス十二時ヲ過キタリ (略)

十七日 午前一時アヌラーダプラ (無憂城) ヲ発シテミヒンクレ」ニ向フ

資料にある1890年6月16日のその日、小泉はアヌラーダプラに滞在しており、7行目の記載日と合致する。また彼はこの日、靈智會支部長ルラパナワ氏に会ったと記載している。この支部「長ルラパナワ」氏こそ、この資料の経文を書写し、日付等の奥付を書いた Rālapānāvāva 氏と筆者は考える。『見聞記』では、当該資料に関して何も記載されていないため、あくまで推測となるが、奥付にみる Rālapānāvāva が現地のことばで発音された際、小泉が「ルナパナワ」と聞き取りこのように表記したと考えればこの推測は可能であろう。

おわりに

博多萬行寺資料調査で確認された小泉了諦招来のシンハラ文字資料について、以上のような検討を行った。シンハラ写本の内容検討とともに、シンハラ文字資料についてもさらなる精密な検討が必要である。それにしても、小泉了諦と同時期の留学僧たちは、いかなる梵文資料を招来しているのだろうか。その一部はすでに報告されているが¹⁷⁾、この分野での調査研究が進むことを願ってやまない。

参考資料

小泉了諦の生涯や留学報告に関するもの

中山義樹編 1893 (明治26年)『西游見聞記』 交同社 152p.

- 小泉了諦編 1910 (明治43年)『七里恒順師語録』 顕道書院 205p.
- 小泉了諦 1916 (大正5年)『修養逸話 六十六年夢物語』 顕道書院 391p.
- 小泉了海 1970 (昭和45年)『小泉了諦小伝』 鯖江市法林寺 125p.
- 小泉了慧 1986 (昭和61年)『50回忌法要記念 椰陰道人 小泉了諦遺品遺墨展図録』 49p.
- 奥山直司 2004 「ランカーの八僧—明治二十年代前半の印度留学僧の事績—」
『北條賢三博士古稀記念論文集 インド学諸思想とその周延』
山喜房仏書林 pp.89-106.
- 奥山直司 2008 「明治インド留学生たちが見た「比叡」と「金剛」の航海」
『アジア文化研究所研究紀要』第43号 東洋大学 pp.65-81.
- 石井公成 2008 「明治期における海外渡航僧の諸相—北島道龍、小泉了諦、織田得能、
井上秀天、A・ダルマパーラー—」『近代仏教』第15号
日本近代仏教史研究会 pp.1-24.

その他

- v. Hinüber, O. 1996 *A Handbook of Pāli Literature*. Walter Gruyter · Berlin · New York
- Matsumura, J 1992 *THE RASAVĀHINĪ OF Vedeha Thera*. TOHO SHUPPAN, INC OSAKA
- 松村淳子 2002 「ダンマソングカ王物語—Rasavāhinīの素材に関する一考察—」
神戸国際大学紀要 第63号 pp.27-38.
- Rahula, T 1981 *Rasavāhinī Jambudīpuppattivath: an edition together with an English
translation. Thesis (Ph.D.) Australian National University, 1981*
- Rahula, T 1984 *The Rasavāhinī and Sahassavatthu : A comparison.*
*THE JOURNAL OF THE INTERNATIONAL ASSOCIATION OF
BUDDHIST STUDIES, VOL.7 pp.169-184.*
- Vedeha Thera 1898 *Rasavāhinī* Ebook and Texts Archive University of Tront-Robarts
Library. p.1

註

- 1) text : - satthacaraṇaṃ saraṇaṃ
- 2) text : - dhānaṃ
- 3) text : pakubbato passanti vanabhūtāni taṃ bālo maññatī raho
- 4) Dhātuvamsa ed.by D. Sri. Sumedhankara, Colombo, Mahabodhipress, 1930.があるが未見。

Telakaṭāhagāthāに関する研究として、以下の論文がある。

THE TELAKAṬĀHAGĀTHĀ ed. by EDMUND R. GOONARATNE,
Journal of PALI TEXT SOCIETY, 1884, pp.49-68.

‘THE NOEN SA BUA INSCRIPTION OF DONG SI MAHA BO’ PRACHINBURY,

New evidence on cultural relations between Sri Lanka and Dvaravati kingdom',
Mendis Rohanadeera, *Journal of The Siam Society*, Volume 76, 1988, pp.89-99

- 5) Dhammapada 183 PTS. 1994, p.52
- 6) 「梵語経文 今村久太夫 所有」『椰陰道人 小泉了諦遺品遺墨展図録』 p.33
sabbapāpassa akaraṇaṃ kusalassa upasampadā (1行目)
sacittapariyodapanāṃ etaṃ Buddhāna sāsanaṃ (2行目)
- 7) Saṃyutta-nikāya Sakkasaṃyutta XI Sakka-namassana(1) PTS. 1960 p.234
この偈頌は、Khuddakanikāya Khuddakapāṭha-aṭṭhakathā maṅgalasuttavaṇṇanāにおいても見られる。
- 8) 上記注1、2に示した『ラサヴァーヒニー』のテキストに依った。
- 9) The Jātaka by Fausbøll PTS. 1963, p.19
- 10) Dīgha-nikāya xvi.Mahāparinibbāna-suttanta 6.10, vol.2, 1903, p.157
- 11) Saṃyutta-nikāya I.2.2, vol.1,1960, p.6. aniccā sabba saṅkhāra VI.2.5, p.158. など。
- 12) semhamが本来の読みでは。
- 13) meは、削除すべきか。
- 14) DVATTIMSĀRAM Khuddaka-Pāṭha III PTS. 1915, p.2
- 15) Dīgha-nikāya vol.2, 1903, p.293
- 16) この箇所判読に関しては、清水洋平先生の知人であるスリランカ人にご協力いただいた。深く謝意を表します。
- 17) 「三会寺所蔵パーリ語貝葉写本等調査報告」『タイ国ワット・ラジャシッダラム寺院他所蔵写本に基づく蔵外仏典の研究』清水洋平、畝部俊也 2009年度～2011年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告 pp.39-46。
ここでは、明治13年から明治23年の4年間、スリランカに渡り修行に励みつつパーリ語も修めた日本人最初のスリランカ上座部仏教僧侶、釈興然(1849～1924)将来の貝葉写本調査について報告されている。

本稿を結ぶに当たり、資料の使用と公開をご許可いただきました福岡教区福岡組萬行寺住職ならびに副住職には、心より感謝申し上げます。また、シンハラ文字解読に関して多くのご教示をいただきました名古屋大学大学院准教授畝部俊也先生ならびに大谷大学非常勤講師の清水洋平先生にも深く感謝申し上げます。小泉了諦はじめ明治期の留学僧に関する研究の成果をご恵贈いただきました高野山大学教授奥山直司先生、小泉了諦に関する貴重な資料をご恵贈いただきました鯖江市まなべの館竹内信夫様に、深く謝意を表します。

(なかがわ まさのり：人間科学科 教授)